

# 日本ドミニコ会の宣教理念と布教方法

16・17世紀の長崎を中心に

滝澤修身

Concepts and Evangelization Methods of the Dominicans  
around Nagasaki in the sixteenth and seventeenth centuries

Osami TAKIZAWA

## Abstract

Since the Meiji period, the evangelization through European missionaries in Japan during the sixteenth and seventeenth centuries was undertaken exclusively by the Jesuits. Because the Jesuits were actively engaged in evangelization in Japan until the late sixteenth century. However, when the Mendicant Order started to participate in the evangelization of Japan, their activities were even more effective. This article focuses on the Dominicans, one of the Spanish mendicant orders, and seeks to analyze the method of evangelization employed in the city of Nagasaki in the seventeenth century.

## はじめに

日本でのドミニコ会は、1602年より薩摩布教を始め、その後、肥前、長崎、京都、大阪に活動の場を移した。その後、長崎が活動の舞台となり、多くのドミニコ会士が殉教した。筆者は、日本で宣教したヨーロッパ宣教会に関する史料を収集・分析するためにスペインに12年半滞在した。スペインでは、日本でも布教活動に携わった経験もある故ヘスース・バジェス神父のご教示を得て、17世紀の日本ドミニコ会の史料の在処も明らかにした。2009年より、筆者はスペインのサラマンカ大学で教鞭をとったが、この時、サラマンカのサン・エステバン修道会のホセ・バラード神父と出会った。この修道院は、幾人ものドミニコ会宣教師が17世紀の日本布教へと送り出されていたことでも知られていた。また、この時期、日本の松山のドミニコ会本部のホセ・デルガード・ガルシア神父とも知遇を得た。この三者で、日本のドミニコ会の歴史をまとめ、出版しようという計画となった。その結果は、『ドミニコ会布教史 日本、長崎をめぐる』という著書として完成した。近日中にスペインで出版予定である。本稿は、その一章であるドミニコ会の日本での宣教方法とその理念に関するものである。

ホセ・デルガード・ガルシア神父のご尽力により、日本布教に携わったドミニコ会の書いた

書簡や報告が復刻された。10名ほどのドミニコ会宣教に係る史料である。しかし、史料集は現れ始めてはいるものの、ドミニコ会が具体的にどのように日本、そして長崎での布教を展開したのかということに関する分析は皆無であった。筆者は、この問題を解決するために、本稿で、ドミニコ会宣教師の日本と長崎での宣教方法とその理念をまとめてみた。本稿を仕上げるに当たって、ホセ・デルガード・ガルシシア神父からは多くの史料を提供していただいた。また、筆者は、長崎県から学術補助金をいただき、マニラに残存するドミニコ会の17世紀の日本関係史料を研究した。ホセ・デルガード・ガルシシア神父及び長崎県には心から感謝を捧げたい。それでは、17世紀のドミニコ会宣教師が、日本、特に長崎でどのように布教を展開したのか、また、その理念がいかなるものであったのか分析していきたい。本稿は11章から構成されるが、この順序は、史料の中に記述が最も多く現れた課題から取り上げた。いわば機能的に研究を展開した。

## 第1章 「十二使徒」に倣った宣教方法

キリシタン時代のドミニコ会の史料を分析すると、彼らの宣教法は、「十二使徒」に倣っていたことが理解できる。つまり、日本ドミニコ会宣教師は、十二使徒と初期教会の伝統を守って日本人に布教を展開したのであった。ある日、ドミニコ会宣教師が「寺院を建てよ」と命じられ動揺しているキリシタン達に遭遇した。この時、ドミニコ会宣教師は、サン・パウロの言葉を引いて次のように宥めた。『勇気をもて戦わざる人は冠を得ず<sup>1</sup>』

日本で宣教に従事したドミニコ会宣教師は、ヨーロッパの中世キリスト教の伝統を非常に大切にしていた。彼の記録には、サン・アウグスティン、グレゴリオ・マグノ、サント・トマス・デ・グスマン、サン・ベルナルド、トマス・アキナスなどの聖人の名がしばしば登場する。中にはスペインの聖人達も含まれている。ドミニコ宣教師は、彼らの母国スペイン出身の聖人達によって宣教の勇気を得ていた。彼らの書簡には、聖アウグスティンは「全世界を救うためであっても、軽罪を犯してはならない」と語った。聖ベルナルドは「神は二つの足を持ち給う、一つは厳格の、他は慈悲の足です」と述べた。「聖グレゴリオ・マグノは「もし愛であるなら偉大な行為をなす。善行を拒むなら愛ではない<sup>2</sup>。」といったなど聖人達の言葉が書き連ねられている。

一方、ドミニコ会宣教師は、初期キリスト教教会から引き継ぐ伝統的理念である「キリスト教の普遍性」を追求した。つまり、「一つの教会、聖なる教会、使徒的教会」を心に秘め布教していた。多神教を信奉する日本人に対しても、断固として「唯一なる神キリスト」の救いを説いた。トマス・デ・スマラガ神父は、彼の殉教を前にして、日本人に次のように説教した。「キリスト教の他には靈魂を救う道がない。仏僧の教えていることは誤りである。日本人の利益のためにた

<sup>1</sup> 井手勝美訳、ホセ・デルガード・ガルシシア註、『コリヤド日本キリシタン教会史補遺1621 - 1622』、雄松堂書店、1980、80ページ。

<sup>2</sup> ホセ・デルガード・ガルシシア、『福者アロンソ・デ・メーナ 書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1982、149ページ。

だこれだけのことを理解させる目的で修道士は日本にきたのであり、自分のためにはこの世の何物も求めず、この正しい要求のために総てを失うのである<sup>3</sup>。」

## 第2章 教会

ドミニコ会宣教師が日本にやってきた主要な理由の一つに教会を建てることあげられる。しかし、当時の日本はキリスト教迫害の真ただ中で、教会を建築することは至難の業であった。しかし、17世紀初頭、将軍はポルトガルとスペインとの貿易を促進したいがために、イエズス会士には京都と大阪、フランシスコ会士には江戸に教会を建設することを許した<sup>4</sup>。こうしてイエズス会は、新たに教会を建設したのだった。ドミニコ会もアロンソ・デ・メナが1604年に徳川家康の謁見を賜り、日本での居住許可、大都市でも教会建設の許可を手に入れることができた。同年、フランシスコ・デ・モラレス神父が、家康と家忠を訪問し、長崎での教会の建設許可を許された<sup>5</sup>。

ここで、それ以前のドミニコ会による日本での教会建設の様子を分析してみたい。1602年、ドミニコ会は日本にやって来た時、彼らの乗って来た船の船長が、薩摩の甕島に、古い仏教寺院を利用して仮の教会と住居を建設した。この教会は、畳敷きで、2つの部屋を有していた。一部屋は教会として、もう一つの部屋は住居として使用された<sup>6</sup>。フアン・デ・ラ・バディーア修道士は京都に2、3か月滞在した後、甕島で、教会と住居を公式に建設する許可を得た。板、竹を使用した小さな教会であり、領主が依頼した労働者によって建設された<sup>7</sup>。甕島の教会は、「ロザリオの聖母」という名が与えられた<sup>8</sup>。その後、ドミニコ会は甕島の京泊に一つの教会を建てた<sup>9</sup>。

一方、佐賀藩の領主である鍋島直茂は、ドミニコ会に非常に好感をもっていた。彼の計らいで、ドミニコ会は1606年に、肥前に3つの教会を建てることできた<sup>10</sup>。浜町に「ロザリオの聖母教会」、佐賀に「サン・パブロ教会」、鹿島に「サン・ピセンテ教会」が建設された<sup>11</sup>。1610年7月6日には、サン・パブロの祝日に、京都に一つのドミニコ会の教会が建てられた。『ロザリオのサンタ・マリア』と命名された<sup>12</sup>。その後、伏見に神父のための住居が建てられ、教会にも使用さ

<sup>3</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、ロザリオ聖母管区本部、1990、318ページ。

<sup>4</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、149ページ。

<sup>5</sup> ホセ・デルガド・ガルシア、『福者アロンソ・デ・メナ 書簡・報告』、63ページ。

<sup>6</sup> 前掲書、60ページ。

<sup>7</sup> 前掲書、60ページ。

<sup>8</sup> オルファネル、井手勝美訳、『日本キリシタン教会史(1602-1620)』、雄松堂書店、1977、6ページ。

<sup>9</sup> ホセ・デルガド・ガルシア、『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1983、100ページ。

<sup>10</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、133ページ。

<sup>11</sup> 前掲書、138ページ。

<sup>12</sup> ホセ・デルガド・ガルシア、『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス 書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1976、47ページ。

れた<sup>13</sup>。その後、大阪にも一つの教会が建設された<sup>14</sup>。長崎には、1609年5月の上旬に、「サント・ドミンゴとサンタ・ロザリオの教会」が建てられた。この他、ドミニコ会は、浜町、鹿島などに修道院を建設した<sup>15</sup>。

### 第3章 日本ドミニコ会の宣教活動

教会が建設されると共に、日本ドミニコ会士達は布教活動を開始した。彼らの主要な仕事は、説教を行なうこと、洗礼を授けること、告解を聴くこと、秘跡を施すこと、死者を埋葬することであった<sup>16</sup>。ドミニコ会宣教師の日本布教は、厳しい迫害と向かい合わせで行われた。1587年、豊臣秀吉は「バテレン追放令」を発した。徳川家康も秀吉の禁教政策を受け継いだ。1600年以降、南蛮国との貿易推進を考慮して、キリシタン信仰を大目に見た。しかし、1602年に禁教令を発し、キリシタンに厳しい迫害を始めた。数多くのキリシタンが捕えられ、拷問を受け、処刑されていった。こうして、日本におけるキリスト教の黄金期は終焉を遂げた。こうした状況下、ドミニコ会宣教師の主要な仕事は、以前イエズス会宣教日から洗礼を受けたキリシタンを維持し、転んだ者達を立ち返らすことであった。日本でのドミニコ会宣教は、身分を区別することなく、すべての階層を対象として進められた<sup>17</sup>。彼らの宣教は、毎日、絶えることなく続けられた。フアン・デ・ロス・アンヘレス・ルエダ神父は、厳しい迫害下での宣教の状況を記録している。

“Y estos conco años, todo ha sido levantar millares de renegados: Unos, que había treinta y cuarenta y más años que estaban renegados; y entre los unos y los otros, muchísimos que se habían hecho de otras sectas o (religiones), y adorando kamis y hotokes que son los ídolos de Japón. Ya (a) muchos de ellos les hemos quitados y quemado, de ellos mismos, imágenes de los dichos kamis y hotokes, nóminas (amoletos escritos), y luzus, que son sus rosarios (AAP., Nss. T.301., f.74 v-75)”

「この5年間に数千人の棄教者を立ち返らせました。ある人々は今回の迫害で棄教し、他の人々は30年か40年あるいはもっと前に棄教していて、そうした人々の内の大部分の者が他の宗教に信じ、日本の偶像である神々や仏達を拝んでおりました。それで改心者たちに上記の神仏の偶像や掛け軸やその宗教のロザリオである数珠を取り集め、自分たちの前で焼くようにさせました<sup>18</sup>。」(有馬、1619年12月6日)

<sup>13</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告』、103ページ。

<sup>14</sup> 『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス 書簡・報告』、56ページ。

<sup>15</sup> 『福者アロンソ・デ・メーナ 書簡・報告』、77ページ。

<sup>16</sup> 『ホセ・デルガド・ガルシア、『福者フアン・デ・ロス・アンゲレス・ルエダ神父 伝記、書簡、調査書、報告書』、聖ドミニコ修道会、2005、265ページ。

<sup>17</sup> 『日本キリシタン教会史(1602-1620)』、160、258ページ。

ドミニコ会宣教師の布教は完全に秘密裏に行われた。彼らは、秘かにキリシタンの家々、野にある小屋、山中、谷に隠れ布教を続行したのだった。17世紀になると日本にはヨーロッパ人宣教師は次第に姿を消していった。ドミニコ会のその例外ではなかった。多くの宣教師達は、これ以上働けないほど疲労困憊した<sup>19</sup>。度々、病魔に襲われることもあった<sup>20</sup>。1609年に、アロンソ・デ・メナ神父は宣教の厳しさについてこう言及している。

「これらの苦労のために修道士が病気になる時にでも、薬・刺絡・見舞品・敷布団・敷布など何もなく医者もいなかった。……冬が来て雪や氷が厳しい上に合わせて日々貧窮が激しくなっていく……寝るためには聖ロザリオ管区で用いる寝具以外にはなく、それは一枚の毛布を敷き一枚を上にかけるのみである<sup>21</sup>。」(甕島、1609年)

こうした状況のなかでも、宣教師たちは、ミサを行い、信者の告解を聴くため朝、晩を問わず、様々な場所に出かけて行かなくてはならなかった。1619年3月のアロンソ・デ・メナ神父の記録によると、

「私たちの中の誰かが異教徒の土地に行くとキリシタンの間にたちまち宣教師がいるという声が伝わり、近所は言うまでもなく15レーグア20レーグア或いはそれより遠い土地から、病人の告解やその他の必要のために呼ばれる。すべての人々の告解を聴くためには、大部分の場合に夜間雨や雪の中を疲労しながら山を越え川を渡らなければならない。泊まる所も甚だ不自由であり、時には食べる物も甚だ乏しく、少々良い場合でも少量の米と少量の魚である<sup>22</sup>。」(長崎、1618年3月)

当時のキリスト教は、20、30年の間、告解をしたこともない者たちが大勢いた<sup>23</sup>。彼らのために、ドミニコ会宣教師は、非常な危険を犯してでも、ミサを挙げ、告解を聴こうと試みたのだった<sup>24</sup>。17世紀初頭の日本人キリスト教徒の精神性はどのようなものであったのだろうか。確実に言えることは、17世紀の日本人は、「個人の自由」という概念は存在しなかったであろう。徳川幕府により身分制の確立により、大多数の日本人には「個人の自由」を認められていなかった。

<sup>18</sup> AAP, Nss. T.301., f.74 v-75; José Felgado García, Cartas y Relaciones de Fr. Juan de los Angeles Rueda, OP, Instituto de Filosofía y Teología “Santo Tomás”, Madrid, 1999, p.132.

<sup>19</sup> 『ホセ・デルガド・ガルシア、『福者フアン・デ・ロス・アンゲレス・ルエダ神父 伝記、書簡、調査書、報告書』、184ページ。

<sup>20</sup> ホセ・デルガド・ガルシア、『福者フランシスコ・モラーレス 書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1967、135ページ。

<sup>21</sup> AP., Nss.T. 302., fol.3-fol.4. 『福者アロンソ・デ・メナ 書簡・報告』、61ページ。

<sup>22</sup> ドミニコ会ローマ総古文書館 X163., f. 222 前掲書、204ページ。

<sup>23</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告』、128ページ。

<sup>24</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、72ページ。

こうした「個人の自由」が認められていなかった時代に、ドミニコ会宣教師たちは、日本人たちに「神の前の自由」という概念を教え、日本人キリスト教徒がこの自由を甘受したことは間違いないことだろう。

ここで、ドミニコ会の教区について触れておきたい。1602年、初めて日本布教が、マニラのサント・ロザリオ管区から認められた。すぐに、モラレス神父が、日本の各教区の上長に任命された<sup>25</sup>。ファン・デ・ロス・アンヘレス・ルエダ神父は、1621年9月4日付けの所管で次のように述べている。「ルソン島、メキシコ、ペルーに布教のための各教区が存在しました。しかし、日本ではこの教区というシステムは作動しません。というのは、日本では各地の領主の土地の所有意識が強いので、もし日本のなかに教区を創設したならば、多くの領主たちが嫌悪感をいだくに違いありません。また、もし、教区を創設したのならば、イエズス会はそれを独占するでしょう。これは、布教には適さないでしょう<sup>26</sup>。」

## 第4章 コンフラリア

ドミニコ会宣教師の記録を読み解くと、日本布教で数多くのコンフラリアを作っていたことが確認できる。厳しいキリスト教禁教下では、キリスト教は潜伏して地下活動を行わなければならなかった。こうした状況下、ドミニコ会はコンフラリアを組織して、信仰を守ろうと考えた。

日本ドミニコ会が組織したコンフラリアの中で「イエスの御名のコンフラリア」が存在する。このコンフラリアは、スペインのブルゴスで、ドミニコ会士であるディエゴ・デ・ビトリアによって組織され、1564年4月13日に、ピオ4世によって認可された<sup>27</sup>。このようにスペインで創設された、コンフラリアが日本の土壌に移植されたことは間違いない。

日本での「イエスの御名のコンフラリア」の起源をめぐるには、二説がある。一つの記録によると、1614年に村山等安の息子で宣教師のフランシスコ・アントニオが<sup>28</sup>、ドミニコ会士ナバレテの助力を得て、このコンフラリアを日本に創設したと言う。「十字架のコンフラリア<sup>29</sup>」という異名も持っている。もう一つの記録によると、1616年にナバレテが、このコンフラリアを組織し、生涯を通じてその存続に尽力したと言う。彼の死後は、他のドミニコ会士がこのコンフラリアを指導したと言う<sup>30</sup>。

<sup>25</sup> 『フランシスコ・モラレス書簡・報告集』、16ページ。

<sup>26</sup> 『ファン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ書簡・報告集』、286ページ。

<sup>27</sup> 前掲書、303ページ。

<sup>28</sup> 『フランシスコ・モラレス書簡・報告集』、159ページ。

<sup>29</sup> 『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、161ページ。

<sup>30</sup> 前掲書、289ページ。

「イエスの御名のコンフラリア」には、「ヌメロス」と呼ばれた300名の先鋭部隊が存在した。彼等は、厳しい審査の結果選ばれたメンバーだった<sup>31</sup>。彼は、若年でもなければ老年でもない、中年層によって構成されていた。「ロザリオのコンフラリア」の旧メンバーが「イエスの御名のコンフラリア」に昇進できるのだった。彼は、次のような資格を持った人物でなければならなかった。「宣教師を連れて他の場所に移動し、匿い、危険から助ける。監獄の囚人達を励ます。他のキリスト教徒に先んじて迫害を受ける。」このような決まり事をまもらなければならなかった。彼等は、最も多く働き、信者たちに霊的書物を読み伝えた。迫害のなか、多くの「イエスの御名のコンフラリア」は投獄され、殉教していった<sup>32</sup>。

長崎の町に教会が存在した頃には、「ヌメロス」たちは、白い服に黒の衣をまとっていた。ピロードや他の豪華な布で作られていた。これは、ロザリオの服装といわれる司教の服装であり、葬式や行進の時に着用されたものだった。胸部には、ロザリオ、十字架、ドミニコ会のメダルを垂らした<sup>33</sup>。

ここで、「ロザリオのコンフラリア」について説明してみたい。ロザリオのコンフラリアは、日本に移入される前にすでにヨーロッパに存在していた。教皇ピオ5世が、ドミニコ会のみによる設立を許可した。この創設は、1569年7月29日付け教皇勅書「インテル・デシデラビリア」に記載されてる<sup>34</sup>。日本では、フランシスコ会のジェロニモ神父が、江戸のサンタ・ロサリオ教会にロザリオのコンフラリアを創設したと考えられている。この教会は、1599年5月30日に建設され、1612年に取り壊された<sup>35</sup>。その後、1604年にフランシスコ・モラレスが、目の治療のために長崎を訪問した。その際、長崎にロザリオのコンフラリアを創設したのだった。一か月後にその会員は、2万人を超えと言う<sup>36</sup>。1616年、ロザリオのコンフラリアは新たに活動力を強めた。この会は、2種類の会員によって構成された。「通常会員」と「ヌメラリオス」です。実際のロザリオのコンフラリアのヌメラリオスは、イエスの御名のコンフラリアのヌメラリオスと同じ人々だった<sup>37</sup>。彼等の熱狂的な活動は、1619年まで続いた<sup>38</sup>。

<sup>31</sup> 前掲書、289ページ。

<sup>32</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、145ページ。

<sup>33</sup> 前掲書、167ページ。

<sup>34</sup> 『福者ファン・デ・ロス・アンヘレス 書簡・報告書』、309ページ。

<sup>35</sup> 『日本キリシタン教会史（1602 1620）』、183ページ。

<sup>36</sup> 『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』、130ページ「2万人以上の信者がロザリオのコンフラリアに入りました。それは、長崎にはサンタ・マリアの信仰とロザリオの信仰が根を張っていたからです。信者たちは、ロザリオのコンフラリアについて良く心得ており、ロザリオの祝福を求め、教義や瞑想についてよく質問し、告解や聖体の秘跡を求めました。モラレス神父と教会の中には、一日中、信者が溢れかえっていました。サンタ・マリアの御加護でしょう。」（『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』、223ページ。）

<sup>37</sup> 『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』、160ページ。

<sup>38</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、202ページ。

ロザリオのコンフラリアは、次のように構成されていた。各場所のコンフラリアには、男女一人づつの組長と男女の組員がいた。組長たちは、霊的修行のために会員を集め、霊的書物を読み聞かせた。この霊的修行は、数日間続くこともあった。更に、彼等は見事に殉教を遂げるまで祈り続けなくてはならなかった<sup>39</sup>。ドミニコ会士のサルバネス神父は、ロザリオのコンフラリアの組長、住民、知人やこの組を信奉するキリスト教徒のために、告解を聞き、聖体を与えた<sup>40</sup>。さらに、ドミニコ会は、ロザリオのコンフラリアのための冊子を作製した。また、ロザリオの絵を印刷し、キリシタン達に配布したのだった<sup>41</sup>。ロザリオのコンフラリアをめぐっては、興味深い話が残されている。1619年に、有馬で仏教寺院が改築された。有馬の領主は、ロザリオのコンフラリアの会員に援助を求めた。しかし、彼等はこう答えたと言う。「私たちはキリスト教徒です。そこで手伝うことはできません。もし、あなたがキリスト教に入信するならば、私たちは2倍お助けします<sup>42</sup>。」

続いて、ドミニコ会神父であるアロンソ・デ・メナのコンフラリアについて説明したい。メナ神父の指導の下に、長崎へ移住した佐賀のキリシタン達が、このコンフラリアを作ったと言う。組員たちは、「もしキリスト教徒迫害が起こった時は、いち早く公共の面前に現れよう」と決意していました<sup>43</sup>。この組の会員たちは、ルイス・デ・グラナダの『ぎあどべかどる』を霊的書物として読み、自らを鞭打ちたり、精神修養をしていた<sup>44</sup>。

以上のコンフラリア以外にも、大迫害の最中に数多くのコンフラリアが組織された<sup>45</sup>。ドミニコ会宣教師は、忠実なキリシタンを長とし、組と呼ばれるコンフラリアを組織した。男性と女性のための組が存在した。この組の活動例は、次のようなものが挙げられる。信者の家に集まり、「ぎあどべかどる」や聖人伝などの宗教書を読み、断食、苦行を行ない、平和や愛を希求し、迫害においては殉教をするという精神を養った。組は、20、30名をもって構成され、掟が存在した<sup>46</sup>。

長崎では、代官である村山等安が、組の設立のために尽力した。1619年10月25日付けのドミニコ会宣教師の手紙によると、長崎代官の息子であるアンドレス等安は、彼自身の組を組織したと言う。その掟は、以下のようなものであった。

<sup>39</sup> 『フランシコ・モラレス 書簡・報告書』、85ページ。

<sup>40</sup> 『聖ハシント・サルバネス 書簡・報告集』、81ページ。

<sup>41</sup> 『日本キリシタン教会史(1602-1620)』、180ページ。

<sup>42</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、204ページ。

<sup>43</sup> 『アロンソ・デ・メナ 書簡・報告書』、29ページ。

<sup>44</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、29ページ。

<sup>45</sup> 『アロンソ・デ・メナ 書簡・報告書』、130ページ。

<sup>46</sup> 前掲書、168ページ。



- (1) キリスト教の信仰をしっかりと表わすこと。他の宗教やその教えを信じない。
- (2) キリスト教の教義に反したことを行なわない。もし、実行できないなら、火刑や油で焼かれたほうがましである。
- (3) 生きる者は、死者を葬らなければならない。
- (4) 己自身を愛すること<sup>47</sup>。

更に、長崎代官の他の息子であるアンドレス・トクアンは、1614年以降、長崎の組の組織化に尽力した<sup>48</sup>。モラレス神父の1619年付の書簡には、ある組を組織するためになされた彼の努力は、次のように記録されている。

「(アンドレス徳庵は、)お互いに心を堅固にし励まし合うために、定められた日に集まるという義務の課せられた組を作った。それは祈りや贖罪及びその他の聖修練を行ない、特に現在の迫害に際して如何にふるまうべきかということを相談するためであり、皆この組に加入する時に、如何なる苦しみに遭遇しようとも棄教はしないという署名をしました。これは神への大きな奉仕ではあったけれど、強い反対を受けました。しかしトクアンの希望と努力によってこの反対は説き伏せられました。彼の父親の支配下にあった人々は殆んどこの組に入りましたが、これはキリシタンの信仰を堅めてその行いを導くのに極めて大きな効果がありました<sup>49</sup>。」

## 第5章 ロザリオの信心

1616年以降、長崎の町とその周辺にロザリオの信心が広がった。後には、日本全域にこの崇拝は広がってゆく<sup>50</sup>。1619年12月6日付けのファン・デ・ロス・アンヘレス修道士の書簡には、棄教者や罪人たちの改心のためにロザリオの信心の様子が記されている。

「ロザリオの信心の起源を彼らに説明し、同時にこの目的に沿って私たちの主がロザリオの祈りを通してなされた奇跡の数々を話すことに勝る効果的な手段はない。この手段を通して、癒された棄教者や罪人は数えきれないのです。祈ることを知らない人々、キリシタンという名前だけのあるいはそれすら隠している人々がこの信心会に入会すると、毎日ロザリオの祈りの全部を唱え、また多くの者が日に二度も三度も唱えるほど変化したのです<sup>51</sup>。」

---

<sup>47</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、111ページ。

<sup>48</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、29ページ。

<sup>49</sup> 『フランシコ・モラレス 書簡・報告書』、203ページ。A.P. Mss 301 f.105v.

<sup>50</sup> 『ファン・デ・ロス・アンヘレス・デルエダ書簡・報告集』、173ページ。

<sup>51</sup> 前掲書、173ページ。

フランシスコ・カレロ神父はその「ロザリオの勝利」の中で次の様に書いている。「聖なる殉教者フライ・アロンソ・ナヴァレテの構図によって描かれた御絵がこの信心を上げた。それはその腕におん子を抱いた聖母が、貴いおん子と同じように、教皇たち、枢機卿たち、王たちや民衆にロザリオを配分しておられる御絵です。縁取りとして周りにロザリオの諸玄義が描かれ、その下部にはどのようにして栄光に満ちた太祖・聖ドミニコがこの聖なる信心会の発案者となったかが描かれてありました<sup>52</sup>。」

1621年には、1500枚のロザリオの絵が描かれ、配られた<sup>53</sup>。ルエダ神父は、この方法で、信者を獲得し、キリシタンの生活を改善させたのだった。それ故に、ルエダは「ロザリオの神父」と呼ばれた<sup>54</sup>。

## 第6章 清貧の思想

イエス・キリストの死後、まもなくキリスト教徒の修道生活が開始された。ローマ帝国でのキリスト教迫害の後、4世紀中葉から、人々は純粋なキリスト者としての生活を探し求めたのだった。こうして修道院での生活が始まった。キリスト者たちは、清貧、服従、貞潔の3つの美德を彼等の生活に求めた。5世紀には、聖ベネディクトは、ベネディクト会を創設し、修道院生活の規則を確立した。この規則は、他の修道院にも影響を与えた。中世期に3つの請願 清貧、服従、貞潔 が確立された。ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスティーノ会の設立にとって、この3つの請願は非常に大切なものだった。

1586年の聖ロザリオ管区の規則は、伝統的な規則を重要視している。3つの請願の内、ドミニコ会にとっては清貧の概念が最も重要であった。ドミニコ会の記録には、日本のドミニコ会士たちは、聖ドミンゴ・デ・グスマンの理念、マニラの聖ロザリオ管区の理念を確認し、清貧を追求したそうである。1619年3月15日付のハシント・オルファネルの書簡によると、日本のドミニコ会の教会は運営資金を持っていなかったが、13年の間、日本では一切資金を受けなかったことが記されている<sup>55</sup>。また、フランシスコ・モラレス神父は、日本にお金を一切持たずやって来たことが知られている<sup>56</sup>。すべてのドミニコ会士は断食を行ない、粗末な修道服と家で暮らした<sup>57</sup>。食べ物不足した時、ルカス・デ・エスピリツ・サントは、40日間の間ただ大根の葉のみを食べ

<sup>52</sup> 前掲書、155ページ。

<sup>53</sup> 『フアン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ書簡・報告集』、295ページ。

<sup>54</sup> 同書、32ページ。『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、129ページ。

<sup>55</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、93ページ。

<sup>56</sup> 『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』、219ページ。

<sup>57</sup> 『聖ドミニコ会日本報告集』、29ページ。

ていたそうである<sup>58</sup>。ドミニコ会宣教師は、清貧を強調し、特に貧しい日本人をキリストの教えに導いた<sup>59</sup>。特に社会の上層者も好み布教を試みたイエズス会に対し、ドミニコ会は正反対であった。やがて、日本人は、イエズス会とドミニコ会の宣教法の違いを明確に認識していくようになった。多くの日本人が、ドミニコ会の気風を好むようになっていった<sup>60</sup>。トマス・デル・エスピリト・デ・スマラガは、1608年8月16日の書簡に次のように記している。

「私たちは聖ドミニコや聖フランシスコの修道会の中に見られる現世軽視の徳が、この未信者を改宗させる上の数多の困難を打ち破ることを神に期待している。何故ならば神は改宗事業の法則や模範を示し給うたのであり、その御言葉に誤りはないからである。だから私たちは日本人の間できわめて貧しい生活をしているのであり、少し前に解ったことであるが、日本人はそれを秀れたことと考えているのである。何故ならある身分の高い人々が、私たち（修道士）は彼らの崇拜する神仏より立派であり、神のためより人間のために働いている、と言っているからである<sup>61</sup>。」

日本イエズス会士は国外との貿易活動に参与し、巨大な富をえていたが、ドミニコ会士は、日本では貿易は一切行わなかった。ドミニコ会士は、船舶での事故をきっかけに、一切日本では貿易活動に関与しないと決めていたからである。1605年11月20日、ドミニコ会宣教師であるトマス・デル・エスピリト・サント・デ・スマラガは、この事件についてこう述べている。

「第一に申し上げることばディエゴ・ホルへの船のことです。それは無事に港に着いたのですが、港で強い嵐に襲われ岸に打ち付けられ、その積荷をほとんど失いました。これによって私は今後この（貿易という）手段によってはならないという教訓を十分に受けました。何故なら効果がないし、あったとしてもそれは奇蹟的なもので、修道士にとってはこの方法は大きな不安の基です。これらの大名はみな貪慾ですから自分たちの利益になると思えば求められたことを悉く容れますが、そうでない場合にはすべての門戸を閉ざします。特別な目的のためではなく靈魂の救いの為にキリシタンになった貧しい人々はその信仰を永く維持しますから、もし私たちが貿易船やその他の目的と関係なく貧しい土地に住むとができるならば、それは大きな慰めであるし、彼らは私たちの愛と教義のみを見るでしょう<sup>62</sup>。」

<sup>58</sup> 『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、160ページ。

<sup>59</sup> 同書、160ページ。

<sup>60</sup> 『ファン・デ・ロス・アンヘレス・デル・エダ書簡・報告集』、261ページ。1621年9月4日付の書簡には、「日本人は、ドミニコ会士の清貧と謙虚さに心を打たれ、彼らを領内に導いた。」「ファン・デ・ロス・アンヘレス・デル・エダ書簡・報告集』、295ページ。「島原のファン・リベイは、ドミニコ会士だけに家を提供した。」（1621年9月4日付書簡）と記録されている。

<sup>61</sup> 『福者トマス・デル・エスピルトウ・デ・スマラガ 書簡・報告』、62ページ。

<sup>62</sup> 同書、38ページ。AAP. Mss. 301 f. 401.

イエズス会の場合、ローマ教皇、ポルトガル王からの布教への援助金は望めなかった。そこで、貿易に頼らざるを得なかったのである。さらに、日本の領主たちは、貿易を目当てに改宗する者もいた。実際、何人かの日本の領主たちは、ドミニコ会が貿易に従事しないことに不満を抱く者さえもいた<sup>63</sup>。しながら、ドミニコ会士は貿易を行わず、彼の清貧の思想を守り抜いたのであった。

清貧の他、日本のドミニコ会士は服従の思想も遵守し、マニラのロザリオ管区の書いた規則に従って上長に服従の意志を示した<sup>64</sup>。九州では、ドミニコ会士は<自己犠牲>のシンボルと称せられた<sup>65</sup>。貞潔に関しても、ドミニコ会士は日本で何一つ性的問題を起こさなかった。日本人ドミニコ修道女は、生涯、貞潔を守り抜いたことが知られている。このように、日本のドミニコ会士の心の中には、清貧、服従、貞潔の思想がしっかりと流れていた。

## 第7章 共存

1549年に日本布教が開始されて以来、イエズス会は日本布教を独占しようと試みた。アレハンドロ・ヴァニャーノは、教皇ともイエズス会が日本布教を行なうべきであるという交渉をなしている。1585年1月28日、教皇グレゴリウス13世は、イエズス会のみが日本に入国すべきであることを認めている<sup>66</sup>。その後、スペイン系修道会も日本へ入獄することが教皇より許可されるが、修道士はフィリピン経由で日本に渡ることを禁じられた。もし、この規則を破れば、破門にさせられた<sup>67</sup>。スペイン系修道会が日本で宣教を始めたものの、教皇パブロ5世はイエズス会のみ日本人への罪の赦免を許した<sup>68</sup>。イエズス会士も当然のように日本布教の独占を主張し、長年、スペイン系修道会は日本での公式な布教は認められなかった。イエズス会の影響で、日本人たちもスペイン系修道会を日本から追放しようと試みた<sup>69</sup>。また、イエズス会は他の修道会の殉教者を認めなかった<sup>70</sup>。1621年9月4日、フアン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ神父は、イエズス会士の態度が傲慢支配欲、貴族的な匂いがすることを訴え、スペイン修道会の態度は謙虚で素朴であると主張している<sup>71</sup>。

<sup>63</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、101ページ。

<sup>64</sup> 『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、73ページ。

<sup>65</sup> 『アロンソ・デ・メナ 書簡・報告書』、54ページ。

<sup>66</sup> 『フアン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ書簡・報告集』、245ページ。

<sup>67</sup> 『福者トマス・デル・エスピルトゥ・デ・スマラガ 書簡・報告』、47ページ。

<sup>68</sup> 『フアン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ書簡・報告集』、282ページ。

<sup>69</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、171ページ。

<sup>70</sup> 『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』、41ページ。

<sup>71</sup> 『フアン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ書簡・報告集』、256ページ。

それでは、ドミニコ会はイエズス会の布教独占にどう対処したのであるだろうか。賞賛すべきことであるが、ドミニコ会宣教師たちは、イエズス会と共存を図ろうと試みた。続いて、このイエズス会、他のスペイン系修道会との共存に関するドミニコ会宣教師の意見を列挙してみよう。

「或る修道会の区域には他の修道会は入らない、という規則の行なわれている印度やマニラの司牧方法を引用しています。しかし日本は違います。未だ平和な時代に各修道会は諸領主の与えてくれた教会にいて、そこで働いていました。他の修道会に対して悪感情を抱かず、他の修道会のいる所にも入って教会を建てる許可を殿から得るよう努力し、私たちは毎日これを見ていました。例えばフランシスコ会の神父が江戸にいた時に、イエズス会士が後から来て教会を建てました。すべてこのような方法で行なわれていたのです<sup>72</sup>。」

Allegan lo que passa en la India y Manila, que una religion no entra en el distrito donde está la otra; pero aqui es diferente, porque, aun quando avia paz en Japon y cada religion estava y acudía en particular donde le davan los tonos iglesias, sin hazer agravio a nadie, procurava cada uno entrar y alcançar licencia del tono para levantar iglesia donde otros estaban. Y esto io viamos cada día, v.gr. en Yendo estaban los Padres fraociscos, y despues fueron allí a fundar los de la Compañía<sup>73</sup>.

「イエズス会とスペイン系修道会、そしてそのコンフラリア間の不和を止めなければならない。唯一の神、聖なる宗教、信仰の教えを愛すべきである<sup>74</sup>。」

1621年9月、ドミニコ会宣教師であるサン・ハシント・サルバネスは、長崎のキリシタン宛ての書簡のなかで、次のように語っている。

「あなた方の仲たがいをやめなさい。私はイエズス会の者である、私はこの、或いはあの信心会の者である、と言うは憂慮すべきことです。唯一の神の使徒全員を、唯一の信仰・教え・宗教の師をことごとく愛しなさい。あらゆる心会の良い所を取りなさい。「この信心会を、或いはあの信心会をやめなさい」とか、平和を乱し混乱の種を蒔く口達者な人々の言葉を「信用せよ」と言うのをやめなさい。ただ師たる神父たちの言葉のみを信頼するように勧めなさい。愛と慈悲の心で一つに団結し、敵に乗ぜられないようにしなさい<sup>75</sup>。」

<sup>72</sup> 『福者ハシント・オルファネル 書簡・報告書』、173ページ。

<sup>73</sup> Ms. APSR, Ms.19, ff.350-351: José Delagado Garcia, Cartas y Relaciones de Beato Jacinto Orfanell, Instituto de Filosofía y Teología Santo Tomás, 1989, p.206.

<sup>74</sup> ディエゴ・コジャード、井手勝美訳、『日本キリシタン教会史 補遺』、雄松堂、1980、58ページ。

<sup>75</sup> 『聖ハシント・サルバネス 書簡・報告集』、93ページ。

ドミニコ会宣教師であるアロンソ・ナバレテは、1627年1月29日の書簡で、4つの修道会士がそろって日本で殉教ができることを喜んでいる。

「日本のイエズス会の管区長代理宛、死ぬ少し前に我管区長よ。ごらんの通り我が主は四つの修道会の者を大村で死なせるために連れて来られました。ですから神私たちが兄弟になることをお望みになっておられます。私たちは分裂しないで或る修道士が入った所に他の修道士が入るのを妨げる事などしないように心掛けましょう。ここのキリシタンにとっては宣教師がたいへん必要でありまから、宣教師はそれぞれ出来る者が先ず彼らを援ければ良いでしょう。

フライ・アロンソ・ナバレテ<sup>76</sup>」

ドミニコ会のファン・デ・ロス・アンゲレス・デ・ルエダ神父の書簡によると、ドミニコ会士は、日本布教においてイエズス会とも協調を保とうとしていたことが理解できる。

## 第8章 人権尊重

ドミニコ会は、日本布教において、非常に人権を尊重していたことが分かる。様々なドミニコ会の書簡のなかでは、ドミニコ会士は、人権、特に人間としての自由や平等を守っていたことが理解できる。フランシスコ・モラレス、ナバレテ神父は、日本人の堕胎の習慣に対して幼児を守っている<sup>77</sup>。スマラガ神父は、孤児の面倒をみ、彼をキリスト教の説教者に育て上げている<sup>78</sup>。ホルダン神父は、一人の女の子の孤児を育て、霊的子供とし、修道女に育て上げた<sup>79</sup>一人のドミニコ会士は、貧しい者に着物を贈っている<sup>80</sup>。

ドミニコ会宣教師の記録には、日本社会には人権保護、自由、平等といった考えが欠如しているということが何度も繰り返されている。17世紀の日本人たちは、封建社会の一つの駒にしかすぎない存在であった。弱者は死を待つしかなかった。ほぼすべての日本人達は、個人の自由という概念を知りうるはずもなかったのである。

人権という問題は、スペインのサン・エステバン修道院、サラマンカ大学出身のドミニコ会士であるフランシスコ・デ・ピトリアが強力に説いた思想であった。南アメリカのあわれな原住民

<sup>76</sup> 『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』<sub>A</sub>、68ページ。

<sup>77</sup> 『フランシスコ・モラレス 書簡・報告書』<sub>A</sub>、90ページ。

<sup>78</sup> 『福者トーマス・デル・エスピルトウ・デ・スマラガ 書簡・報告』<sub>A</sub>、121ページ。

<sup>79</sup> 『日本キリシタン教会史（1602-1620）』<sub>A</sub>、350ページ。

<sup>80</sup> 同書、350ページ。

に心を痛めたフランシスコ・デ・ビトリアが、人権の尊重という思想を強力に主張し始めたのであった。

彼は、書物の中にこう書き記している。

「人間は、奴隷として生まれて来るのではなく、自由をもっている。」(Sent.Morales 1, 132)「子供は他人のために存在するのではなく、自己のために存在するのである。」(Relecc 1 de Ind, 664)「他人に暴力を加える権利は放棄すべきである。」(Relecc 1 de Ind, 718)「永久心神喪失者は希望も理性も持たない。」(Relecc 1 de Ind, 664)「死刑は合法的な逃げ道である。自由が人生を守るのである。」(Coment IV, 44)「裁判官が法を守らず、罪人の告白を得ないならば、罪の宣告をしてはならない。彼は裁判官の義務を怠っているのだから。」(sento 1,154)「事情徴収をせず、罪の裁定もなしに、死刑を命じてはならない。」(Coment III,286)「臣下が戦争に正当性を見出さないのであれば、戦争に参加すべきではないし、王子も彼らの戦争参加を命じるべきではない。」(Relecc II de Ind, 831)「究極の必要性であっても、すべての者は平等に扱われるべきである。」(Coment III, 340)「自然法に従うと人の優劣はない。」(Coment III, 77)、<sup>81</sup>「すべての国家が自国を統治する権利がある。最良ではなくても、好ましい政体を作り上げることができる。」(Coment, 111, 271)「権力者は、いつも根本的に、人間の好ましい性質を引き出すように適切な方策を用いるべきである。」(Coment III, 271)「悪事をなすものは人ではない。」(Relecc. 1 de Ind, 70989)

確かに、フランシスコ・デ・ビトリアの人権尊重とヒューマニズムは、日本のドミニコ会の布教に大きな影響を与えていたことは間違いないであろう。

1621年9月4日の書簡のなかで、ルエダ神父はイエズス会とドミニコ会を含むスペイン系の宣教方法には違い違うことを指摘している。「スペイン系修道会は、謙虚で気取らない、そして福音的完徳に従う」が、「イエズス会は、才能と分別」によって宣教を行なう、と<sup>81</sup>。この言葉は、ドミニコ会が人としての権利、人権をいかに尊重していたのかという現れであろう。

## 第9章 キリストの兵士

日本ドミニコ会宣教師の記録には、頻繁に「キリストの兵士」という考えが登場する。キリスト教が、神、イエス・キリストの兵士になぞられているのである。ディエゴ・コジャードは、かれの著書『日本キリシタン教会史 補遺』のなかで次のように記している。

<sup>81</sup> 『フアン・デ・ロス・アンヘレス・デ・ルエダ書簡・報告集』、258、259ページ。

「信仰の武器で寸分の間なく武装してください。そして武装を完全にするために、盾として聖ロザリオの組とイエズスの御名の組の紋章を、旗と軍旗、十字架、ディオスとその聖なる信仰も目的、栄光と名誉を捧持して下さい<sup>82</sup>。」

「ディオスの騎士兵士と悪魔との戦闘と格闘<sup>83</sup>」

「刑場近くまでの途中、キリストの軍隊は旗すなわち金字で刺繍したイエズスとマリアのいとも甘美な御名をつけた赤い緞子の軍旗を先頭に掲げた<sup>84</sup>」

この考えは、どこから生じているのであろうか？私は、中世ヨーロッパを特徴づけた「十字軍精神」、特にドミニコ会士の出身地であるスペインの「レコンキスタの精神」から影響を受けていると考える。

8世紀の初頭、イベリア半島のキリスト教徒達はイスラム人に征服された土地を奪回し始めた。9世紀から11世紀にかけて、キリスト教徒達は、アストゥリア王国、ガリシア王国を拠点に領土を回復し、拡大していった。その後、ドゥエロ川の南まで再植民が進んだ。11世紀以降、キリスト教徒とイスラム教徒の激しい戦いがみられた。キリスト教徒は、ドゥエロ（1085年）、サラゴサ（1118）を奪回し、カセレス、クエンカ、トルトサなどへ進出していった。1212年は、その後のレコンキスタの運命を決定づけたというラス・ナバス・デ・トロサの戦いに勝利した。その後、キリスト教徒は大いに拡大した。フェルナンド3世のもとに大領土が奪回された。その後、アルフォンソ10世と彼の後継者たちによってレコンキスタはスペイン南方、さらに北アフリカまで拡大していった。この激しい戦いは、1492年のグラナダ陥落まで続いたのだった。

中世スペインでは、イスラム勢力と戦い、国王を援助するために宗教騎士団が形成された。宗教騎士団の起源は、十字軍に見られ、12世紀に異教徒との戦いのためにエルサレムに創設された。その構成員は、兵士であるとともに聖職者でもあった。スペインにも、カラトラバ（1158年）、アルカンタラ（1156年）、サンティアゴ（1171年）、サン・ホルヘ・デ・アルファマ（1201）、モンテサ（1317）と次々と宗教騎士団が創設されていった。イスラム人たちがイベリア半島から駆逐された後、カトリック両王と称されるフェルナンドとイザベルは1493年に宗教騎士団を王権に組み込んだ<sup>85</sup>。

<sup>82</sup> ディエゴ・コジャード、井手勝美訳、『日本キリシタン教会史 補遺』、雄松堂、1980、45ページ。

<sup>83</sup> 前掲書、135ページ。

<sup>84</sup> 前掲書、161ページ。

<sup>85</sup> E. Michael Gerli, *Medieval Iberia*, Routledge, Nueva York y London, 2003, pp.566-568.



宗教騎士団の精神的な流れは、中世以来、スペインにも拠点を置いていたドミニコ会にも流れはたらずである。こうしたドミニコ会士は、日本にやってきたのであるから、日本に十字軍精神、レコンキスタ精神が伝播したことも明らかであろう。

「キリストの兵士」という上記の軍隊的な言葉をめぐって考えなければならない課題がある。キリスト教布教による日本征服論である。イエズス会士のマテウス・コウロスは、「日本へ来たイスパニア人のある人々が何らの用心も注意も払うことなく、スペイン国王による日本征服について語っています。ミゲール・デ・サリーナスという最も重要な人物の一人が、もし国王が彼に3千か4千のイスパニア人を送ってきて、今は信仰のために大村に囚えられている当時ドミニコ会の長であったフライ・フランシスコ・モラーレスを将にするならば、彼はロザリオの組のクリスチアの協力によって日本を征服するであろう<sup>86</sup>。」と書いている。

確かにサリーナスという人物は、ドミニコ会の一部と親しくしていた人物であった。しかし、これは、スペイン人に対する日本人の反動を煽ろうするポルトガル人の言葉である<sup>87</sup>から、日本ドミニコ会は日本征服の意図があったかどうかは明確にすることはできない。東洋や新世界に植民地を作り上げてきた、当時のポルトガル人、スペイン人のメンタリティーの中には、「武力が勝るのであれば日本を征服したい」との意図がまったくなかったかという問題は、解決が難しい問題である。世界帝国を築き上げたスペイン人のメンタリティーのなかには、他国の武力征服という考えは息づいていたのであるから。

## 結 論

17世紀のドミニコ会士の書簡・報告の分析を通じ、様々なことが明らかになってきた。まず、日本にやってきたドミニコ会士は、イエス・キリストの時代以来、中世の初期教会の伝統を引き継いで宣教に従事していることは明確である。また、カトリックの有する普遍性のもと、日本にもカトリック教会が建設された。日本ドミニコ会は、1602年、将軍より教会の建設許可が与えられ、甕島、京泊、佐賀、大阪、長崎に次々と教会を建設していった。

ドミニコ会の宣教史記録の分析から、彼らにとって主要な仕事は、キリスト教公共要理を教えること、洗礼を施すこと、告解を聞くこと、奇蹟を施すこと、死者を葬ることであった。ドミニコ会士が日本に到来した時期は、厳しいキリスト教徒迫害により、多くのキリスト教が長い間告解を行なえなかった時期であった。そこで、ドミニコ会宣教師は、様々な場所を巡回しながら、

<sup>86</sup> 『聖ハシント・サルバネス 書簡・報告集』、49 50ページ。

<sup>87</sup> 前掲書、50ページ。

罪の告白を聞いたのだった。貧困状態で、宣教師達は体を害しながら布教を進めた。

ドミニコ会の日本布教では、組（コンフラリア）の結成が必要不可欠なものであった。厳しい迫害下、キリスト教徒達は地下活動を行うことを余儀なくされていた。組の結成を通じて、キリシタンたちは信仰を教化したのであった。ヨーロッパでは、ただドミニコ会士の上に、聖ロザリオの組の結成が許されていた。故に日本のドミニコ会のコルラディアは、スペインの精神的伝統を踏襲したものであった。当時、マリア信仰が、ドミニコ会によって広まったことも興味深い。

日本ドミニコ会は、3つの請願も重要視した。特に、清貧の思想は重要であった。ドミニコ会士は、日本には無銭でやってきて、彼らの日本での生活も実に慎ましいものであった。次第に、領主層や一般日本人が、ドミニコ会の生活態度に心を惹かれて行った。ドミニコ会は、もっぱら日本ではキリストの精神を日本人に伝えようと試みたのであった。

一方、イエズス会は、教皇、スペイン国王と連絡を取り、日本布教を独占しようと試みた。しかし、ドミニコ会は、日本でもイエズス会、スペイン系修道会との共存を望んだ。イエズス会を奏したのはスペイン出身のイグナシオ・デ・ロヨラ、フランシスコ・ザビエルであった。スペイン系修道会の一つであるドミニコ会も祖国意識が芽生えていたのかもしれない。

日本での宣教活動を通じ、ドミニコ会士は人権尊重の思想を貫き通した。この思想のお蔭で、多くの日本人達が救われたことは事実である。フランシスコ・ピトリア、サラマンカ学派に人権思想が、ドミニコ会の日本布教に影響を与えたのである。ここに、アメリカ布教と日本布教の精神的共通性を見出さなければならない。

ドミニコ会は、日本ではまさに「キリストの兵士」であった。彼らは、十字軍以来の宗教騎士団の精神的な流れを受け継いだ。スペインにも拠点置いていたドミニコ会には、レコンキスタ精神が伝播したことも明らかであろう。このように日本で活動したドミニコ会は、初期キリスト教会、中世期のローマ・カトリック教会の精神性が宿っていたのであり、それが日本布教に受け継がれていったことが明らかであろう。日本ドミニコ会の活動の多くが、長崎で展開されたことも忘れてはならない。

（2017年10月30日 受理）